

[資料]

# 「その人らしさを尊重したケア」に関する文献検討 － 認知症高齢者への実践に向けて－

中川 孝子      藤田 あけみ      西沢 義子

キーワード：その人らしさ、ケア、認知症高齢者

## I. はじめに

わが国における65歳以上の高齢者の推定認知症有病者数は2010年時点で約439万人、2012年の時点で462万人と算出され<sup>1)</sup>、認知症高齢者の増加は従来予想を超えている。そのようななかで、2013年度における養護者および養介護施設<sup>注1</sup>従事者等による高齢者虐待への対応状況等に関する調査<sup>2)</sup>では、養介護施設従事者等による虐待は84.8%、養護者による虐待は70.4%で、日常生活自立度Ⅱ<sup>注2</sup>以上の認知症高齢者に対してであり、高齢者虐待に関する相談・通報件数は年々増加している状況である。また、2013年の全国の警察本部を対象に行った調査では、認知症の行方不明者が約1万人存在し、そのうち、死亡が確認された人が351人、行方不明のままの人が208人存在するという実態が報道された<sup>3)</sup>。

以上のような状況を踏まえて、わが国では、2012年から認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）が策定され、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けるための地域包括ケアシステムを目指す取り組みが行われてきたが、引き続き2015年度から認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）<sup>4)</sup>が策定され、総合的な取り組みが推進されている。

このようななか、わが国では、認知症ケアの

現場において多くの人々が「その人らしさを尊重する」という言葉を用いる場面に遭遇する。認知症ケアにおいて、「その人らしさ」という言葉が使われてきた背景を考えると、わが国の介護保険制度は高齢者の自立支援を目指すものであるが、その根底にあるのは尊厳の保持である。「高齢者の尊厳を支えるケア」は、高齢者が介護が必要になってもその人らしい生活を自分の意思で送ることを可能とすること<sup>5)</sup>と定義されており、「その人らしさ」という言葉は高齢者介護において重要な位置を占めていると考える。英国の老年心理学者である Tom.kitwood<sup>6)</sup>は、認知症ケアの理念として認知症の人々の立場に立った視点を重視したパーソンセンタードケアを提唱し、その中心的概念であるパーソンフッドの定義を関係や社会的存在の文脈の中で、他人からひとりの人間に与えられる立場や地位であり、それは人として認めること、尊重、信頼を意味していると述べている。2005年当時、パーソンフッドは「その人らしさ」と訳され、それを機に日本では「その人らしさ」という言葉は認知症ケアのキーワードとなっている。しかし、英国と日本の歴史や文化、制度の違いを考えると、Tom.kitwood が提唱したパーソンフッドと現在、日本で使われている「その人らしさ」の意味合いは同一ではないと考える。

また、広辞苑等には「その人らしさ」という言葉の記載はなく、日本認知症ケア学会等の関連学会においても、「その人らしさ」の内容に踏み込んだ講演、研究報告等は実施されていない。このように、日本において「その人らしさ」の定義が示されていない状況のなか、認知症ケアに携わる人々が「その人らしさ」について同様の認識を持っているわけではなく、その認識は多様であると考えられる。

また、人は皆「その人らしさ」を持っており、どのような状況の人であれ本質的な「その人らしさ」は変わらない。しかし、その人がおかれた状況によっては、自分のもっている「その人らしさ」の表現が困難になるのではないかと考える。例えば、終末期であり意識レベルが低下している人、認知症が進行し記憶障害がある人等は自分の「その人らしさ」の表現が困難となり、介護者は「その人らしさ」のとらえ方に工夫が必要なのではないかと考える。したがって、「その人らしさを尊重したケア」を行うには「その人らしさ」をどのようにとらえるのが重要であると考えられる。

そこで、これまで報告されてきた「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」に関する文献を分析し、「その人らしさを尊重したケア」とはどのようなケアなのかを明らかにしたいと考えた。

## II. 目的

これまでに日本国内で発表された認知症高齢者を含むさまざまな対象者への「その人らしさ」または「その人らしさを尊重したケア」に関する文献の内容を分析し、認知症高齢者への「その人らしさを尊重したケア」の内容を明らかにし、認知症ケアを実践する上での示唆を得ることを目的とする。

## III. 研究方法

### 1. 対象となる文献の抽出

論文データベースの検索には、医学中央雑誌 Web 版と CiNii Articles を使用した。医学中央雑誌 Web 版の検索キーワードは、「その人らしさ」、「介護」、「看護」、「認知症」、「終末期」、「リハビリテーション」を用い、有効性の観点から原著論文に限定した。また、保健医療福祉関係以外の論文の抽出のために、CiNii Articles を使用し、検索キーワードは、「その人らしさ」とした。その結果、医学中央雑誌 Web 版から139編、CiNii Articles から240編の論文が検索され、両者間の重複文献を削除し232編の文献が検索された。検索された文献の中から症例報告は除き、「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」の内容を明らかにしている研究に限定し、16の文献<sup>7)~22)</sup>を分析対象とした。文献の出版年はこれまでの研究の動向を知るために、あえて限定しなかった。

### 2. 分析方法

- 1) 対象文献のリストを作成し、「著者」、「タイトル」、「掲載雑誌名」、「掲載年」、「研究の種類」、「研究対象」、「その人らしさのケアの対象者」、「調査内容・分析方法」、「その人らしさに対する結果」を項目としてあげた。
- 2) 対象文献の結果から、「その人らしさを尊重したケア」を表している文節や文章を抽出しコードとし、サブカテゴリー化、カテゴリー化した。
- 3) 「その人らしさを尊重したケア」を明らかにするにあたり、「その人らしさ」をどのようにとらえるのかも重要と考え、分析に含めた。
- 4) 分析の妥当性、確実性を確保するため、質的研究に熟練した者を含めて分析を進めた。

## IV. 結果

### 1. 対象文献の掲載年、種類、研究対象者、ケアの対象者

16編の対象文献の概要を表1に示す。

発表年は、1999年1編、2000年1編、2001年2編、2006年1編、2007年2編、2008年1編、2011年4編、2012年1編、2013年1編、2014年2編であった。研究の種類は、質的研究は13編、量的研究3編であった。研究の対象者は看護師5編、看護教員1編、認知症（痴呆性）高齢者3編、認知症対応型グループホームの管理者（介護福祉士）や介護職員1編、保健婦・士1編、高齢者施設の看護職員と介護職員2編、ホームヘルパー1編、老人保健施設の認知症高齢者と看護職員と介護職員1編、訪問リハビリテーションの理学療法士・作業療法士1編であった。各文献で、その人らしさを尊重したケアの対象者として、終末期患者を取り扱った文献は3編、認知症高齢者9編、訪問リハビリテーションを受けている者1編、不特定の対象者3編であった。

## 2. 「その人らしさを尊重したケア」の内容

対象文献の結果から、「その人らしさを尊重したケア」を表しているコードを抽出し、サブカテゴリー化、カテゴリー化した（表2）。68のコードから18のサブカテゴリーが抽出され、さらに、8つのカテゴリーとして、【生活習慣の支援】、【人生歴の把握】、【人や物との繋がり】のケア】、【環境調整】、【希望の成就】、【価値観の尊重】、【役割遂行の支援】、【能力のアセスメント】が形成された。以下、コード〈 〉、サブカテゴリー《 》、カテゴリー【 】とする。

【生活習慣の支援】は、《日常生活や生活習慣に関する内容》と《生活歴や個人の尊厳を視野に入れた生活支援》の2つのサブカテゴリーで構成された。《日常生活や生活習慣に関する内容》は〈職員による生活支援〉〈自律しうる日常生活〉〈日常の生活行動〉〈生活習慣に関するアセスメントを行う〉の4つのコードで構成された。また、《生活歴や個人の尊厳を視野に入れた生活支援》は、〈その人の今までの生活様式〉

〈入居者の行動を尊重し、その人らしさとして見守る〉の2つのコードで構成された。

【人生歴の把握】は、〈患者の生きてきた歴史の把握〉〈それぞれの人生を意識して考える〉〈生活歴に関するアセスメントを行う〉〈思い出を傾聴し、そこからその人の関心と関わりの手がかりを得て、それを生活へと活かしていく〉〈これまでにあった関わりを示す〉の5つのコードで構成された。

また、【人や物との繋がり】のケア】は、《人や物との繋がり》のケア】は、《孤立化の防止》《思いやりの相互作用》《移動の維持・促進》の4つのサブカテゴリーで構成された。《人や物との繋がり》は〈他者との関わり方に関するアセスメントを行う〉〈人や物との繋がり〉〈生活の連続性〉〈その人が関わった環境を見る〉の4つのコードで構成され、《孤立化の防止》は、〈置き去りにしていないか自問自答〉〈心理社会的な孤立化の防止〉〈落ち着かない入居者に付き添い一緒に行動する〉〈入居者の傍にいる時間をつくる〉〈精神面のゆとりを促す対応〉の5つのコードで構成された。また、《思いやりの相互作用》は〈痴呆性高齢者の思いやりをケアする者がしっかりと見きわめ、受け取ること、そして受けとめていることを、その痴呆性高齢者に言語的または非言語的に伝えていく〉〈思いやりを相互にやりとりする〉の2つのコードで構成され、《移動の維持・促進》は〈移動機能を維持する〉〈個室外の空間との連続性〉の2つのコードで構成された。

また、【環境調整】は、《自己空間の確保》《快適な住空間の確保》《環境調整》の3つのサブカテゴリーで構成された。《自己空間の確保》は、〈入居者が自分の居場所として認識できるプライベートな空間を確保する〉〈居場所にいる〉〈安定した個の場所〉〈どの場所、位置が居場所になっているか、そこにどのようにいるかというアセスメントの視点を持つ〉の4つのコードで構成された。《快適な住空間の確保》は、〈快適

表1 「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」の内容分析の研究

著者	タイトル	掲載雑誌名	発表年	研究デザイン	ケアの対象者	研究対象	その人らしさに関する主な結果
1 岡部朋子	「その人らしさを尊重した看護」に関する看護婦の意識 終末期看護に焦点をあて	神奈川県立看護教育大学看護学部研究収録	1999	質的研究	終末期患者	終末期場面に関わったことのあるA医科大学関連病院4～10年目の中堅看護婦	その人らしさを尊重した看護に関する看護婦の意識は1)患者の生きた歴史の把握というケアゴールを土台に、2)生活習慣の尊重、3)患者が役割を果たせる場所の確保、4)価値観の尊重の3つのケアゴールが抽出された。
2 濱本康子	ICUにおける終末期で意識のない患者へのその人らしさを大切に看護について	神奈川県立看護教育大学看護学部研究収録	2000	質的研究	終末期患者	中国地方の某総合病院のICUの状況全体を認識でき、その人らしさを有する臨床経験5年目以上の中堅看護婦	意識のない患者への「その人らしさを大切に看護」は、「家族が患者を意味のある存在として受け入れ、残された時間を共に過ごすためのケア」と「看護婦が患者を意味のある存在として認め、ケアする存在として自覚を促すためのケアをする」との2つのケアが抽出され、患者が残された時間の中で永遠なる存在へと変化し、家族の記憶に深く刻まれていく過程において重要なケアであることが示唆された。
3 宮崎美砂子ら	生活の質に対する行政保健婦・士の接近法	千葉大学看護学部紀要第23号	2001	質的研究	不特定の対象者	機構改革後、1年6か月を経過したA県の全保健所保健婦・士144人、及び6か月を経過したB県の全保健所保健婦・士89人の計233人	個人・家族の生活の質を充たすために保健婦・士が追求している事象として、「その人らしさ」があり、保健婦・士が活動の中で目指していることとして、心理社会的な孤立化の防止、不安への対応、介護負担の軽減、精神面のゆとりを促す対応、要望の表明の促進、主体性の尊重、自己決定の重視、問題解決力の尊重、必要とする情報の提供とサービス活用の促しがあげられた。
4 諏訪さゆりら	痴呆性高齢者の言動の意味の分析 -その人らしさを尊重したケア技術確立に向けて-	東京女子医科大学看護学部紀要	2001	質的研究	認知症高齢者	心身の状態にそれほど変動がなく他者や物との関わりが頻繁にみられる痴呆性高齢者3名	「これまでにあった関わりを示す」「居場所にいる」「自己存在を表現する」「思いやりを相互にやりとりする」という4つのケアゴールが出現し、それよりさらに、「痴呆性高齢者の時間性」、「痴呆性高齢者のケアリング」の2つの構成概念が生成した。以上のような言動の意味から、痴呆性高齢者を安定した人間存在へと導く具体的なケア技術の方向性・可能性が明らかになった。
5 春木桂子ら	その人らしさとケア -主観のプロセス-	看護・保健科学部研究誌	2006	質的研究	不特定の対象者	看護教員6名	その人らしさの構成要素として、①価値観や認識、②希望や意欲、③楽しみ、④今までの生活様式、⑤社会・集団のなかでの役割、⑥日常生活行動が思い出された。
6 中野雅子	認知症高齢者の「その人らしさ」に関する一考察 -コミュニケーション活動とADL評価から-	京都市立看護短期大学紀要	2007	量的研究	認知症高齢者	S県内のJ老人保健施設に認知症を理由に入所中の56名(男性8名、女性48名)	①コミュニケーション活動が活発な高頻度群はADLが有意に高い。 ②ADLの自立度は食事や移動が比較的良好に保たれ、移動は他の項目との関連性がなく高く保たれる。 ③コミュニケーション活動や移動は残された機能の中で、「その人らしさ」を示す機能であることの示唆を得た。
7 和泉成子	ターミナルケアにおける看護婦の倫理的関心の解釈学的現象学アプローチを用いた探求	日本看護科学会誌	2007	質的研究	終末期患者	ターミナル期にある成人患者が多く入院する病棟での勤務経験を1年以上有した看護婦32名	抽出されたターミナルケアにおける看護婦の倫理的関心のなかに、「その人らしさを尊重する」があり、その内容は、一見些細な個人的な好みを尊重することであったり、看護婦自身の価値観とは合致しない患者の価値観を受け入れることであったりと、さまざまな様相を呈していた。

著者	タイトル	掲載雑誌名	発表年	研究デザイン	ケアの対象者	研究対象	その人らしさに関する主な結果
8 原祥子ら	ユニット型介護老人保健施設のケアスタッフが重要と考える認知症ケアの実践内容	島根大学医学部紀要	2008	質的研究	認知症高齢者	県内のユニット型介護老人保健施設（A施設・B施設）で働く常勤の看護職4名（各施設2名）および介護職4名（各施設2名）	看護職では、＜入居者の言動や反応からその人の希望や思いを汲み取る＞ことや、＜入居者の行動を尊重しその人らしさとして見守る＞ことによる＜その人らしさを維持する＞ケア、＜家庭的な雰囲気環境を施設の中に取り入れる＞、＜入居者が、自分での生活環境を施設の中で作り入れる＞、＜入居者が、自分での居場所＞として認識できるプライベートな空間を確保する＞、＜落ち着かない入居者に付き添い一緒に行動する＞ことによる《毎日穏やかに落ち着いて過ごさせるように支援する》ことを重要と考えていた。これからのケアの焦点は【その人らしい生活の維持】であった。介護職では、《どう暮らしたいかという入居者の意向を尊重する》たために、＜入居者の例に倣う時間をつくると＞ことや＜暮らしについて入居者の希望を聞く＞ことが重要な認知症ケアであると捉えており、【その人らしさを生かす支援】に焦点が置かれていた。
9 鈴木早智子ら	介護老人保健施設における認知症高齢者ケアの質改善活動とそれに伴う職員思い	群馬保健学紀要	2011	質的研究	認知症高齢者	介護老人保健施設に入所している認知症高齢者17名と看護・介護職員21名	職員の肯定的な思いのなかで、【その人への関心が深まる】、【丁寧な関わりになる】、【関わることの喜びや学びを実感する】、【その人らしさを保つことを考える】、【その人がよくわかる】が抽出された。【その人らしさを保つことを考える】では、＜それぞれの人を意識して考える＞、＜その人らしさを考え、感情を引き出す＞、＜その人の特技を考える＞がサブカテゴリとしてあげられた。
10 林部博光ら	地域生活支援への視座 訪問リハビリテーションの立場より	総合福祉科学研究	2011	量的研究	訪問リハビリテーションを受けている人	訪問看護ステーションにおいて、訪問リハビリテーションに携わるPT、OT26名（PT19名、OT7名）	「個人の性格や特別な背景を理解すること」では、9割の療士が重点をおくと答えており、「その人らしさ」ということを捉えたアプローチを考慮していることが伺えるが、「社会参加」や「自己決定」については重点度は低い値であった。また、自己と環境は密接な関係にあり、人間を思えばその人が接した環境を知ることがあり、また逆にその人が関わった環境を見れば、「その人らしさ」を知ることができると考えられる。
11 辻泰代ら	その人らしさを継続するための認知症高齢者グループホーム入居支援 - 入居前アセスメントと入居時ケアに焦点をあてて -	介護福祉学	2011	質的研究	認知症高齢者	関東5か所のGH施設長5名（全員介護福祉士で夜勤もやっていた）、入居時のケアを経験したことのある介護職員9名の計14名	入居後もその人らしさを継続するためには、入居直前の生活習慣、これまでの生活歴、他者との関わり方、個人の趣味・嗜好に関する入居前アセスメントを行うことが望ましい。
12 田道智治ら	認知症患者のその人らしさを支える看護実践の構築 - 医療場面に焦点をあてて -	老年看護学	2011	質的研究	認知症高齢者	首都圏の認知症専門病棟3病棟に勤務している看護師5名	医療場面ににおけるその人らしさを支える看護実践を、本人を【置き去りにしていないか】自問自答しながら、【想定外のパワーの発見を期待し】【医学的かつ了解・受容可能な方法模索】するなかで、【快適な生活を創造しようとする志向】が変化し、それに応じて【独自の世界の支援方法を模索】し方法を獲得した結果、本人にとっての【well beingを知覚】し、さらに【自身も喜びを実感】するという構造として示された。

著者	タイトル	掲載雑誌名	発表年	研究デザイン	ケアの対象者	研究対象	その人らしさに関する主な結果
13 山村正子ら	ホームヘルパーの認知症利用者に対する情報収集の特性	介護福祉学	2012	量的研究	認知症高齢者	埼玉県T市のホームヘルパー582部	ホームヘルパーの情報収集の特性として、【家族支援】、【その人らしさの理解】、【訪問時アセスメント】、【臭えにくい日常生活の把握】の4因子が抽出された。【その人らしさの理解】は、「利用者のコミュニケーションの癖（方言、笑い、上戸、皮肉屋等）」について、「利用者と話しやすい話題について」等、利用者の個性や考え方を知らするための情報から構成されており、利用者理解に役立つ情報であり、【その人らしさの理解】と命名した。
14 朝倉京子ら	中期キャリアにあるジェネラリスト・ナースの自律的な判断の様相	日本看護科学会誌	2013	質的研究	不特定の対象者	関東・東海地方の総合病院各施設に勤務する中期キャリアに該当する看護師(25～45歳)、経験8年以上19年以下 19名	ジェネラリスト・ナースは、【その人らしさを引き出し、その希望や意思をつなぐ】ことを目指して、【医師の指示を吟味し補う】、【患者の生活に関わる介入を主導する】ことに関する内容の判断を行っていった。また、彼らが自律的な判断を下そうとする際には、【看護師同士で補い合い、より難しい判断をする】、【微細な変化を素早く全身的にとらえ予測する】という工夫をしていることが明らかになった。【その人らしさを引き出し、その希望や意思をつなぐ】は、＜患者の希望やその人らしさを引き出しQOLを高める＞、＜患者の希望や意思をチームにつなぐ＞、＜人間らしい旅立ちを実現する＞の3つの概念で構成されていた。
15 青柳咲子ら	認知症高齢者に対するアグレイビティケアの内容と効果評価基準	日本認知症ケア学会誌	2014	質的研究	認知症高齢者	A県の老人保健施設3施設と特別養護老人ホーム3施設の看護責任者と介護責任者各1人ずつを依頼し、研究協力の同意を得た。老人保健施設（看護責任者2人と介護責任者3人）、特別養護老人ホーム（看護責任者3人、介護責任者3人）	その人らしい生活活動を支援するケアの内容は、①「限られた認知能力と環境のなかでその人らしさを反映した活動を支援する」、②「現実世界とは異なる独自の認知世界に基いてその人らしさが反映されるように環境を整える」の2テーマが見いだされた。①のサブテーマは、＜希望する活動を遂行可能にするために環境整備を行う＞、＜自らの判断で対応できないことを調整する＞、＜在宅での環境に近づける＞であった。②のサブテーマは、＜否定・強要せず活動が可能なる環境を整える＞、＜ありのままを受け容れる＞であった。その人らしさはなにかについてはあいまいままでもあり、定義については今後の検討が必要だと考えられる。
16 赤木徹也ら	認知症高齢者の「その人らしさ」に基づく施設個室環境の概念化	日本建築学会計画系論文集	2014	質的研究	認知症高齢者	ユニットケアを実践している特養施設とGHI3施設の計4施設の認知症高齢者19名(男性3名、女性16名)で大きく内容の変わらぬ会話が可能で、ADLがある程度自立、個室内の設えが可能な人。	パーソナルフッドの視点から捉えられられる認知症高齢者のその人らしい施設個室環境の概念は、【個人的なこだわり】、【生活の維持性】、【人や物との繋がり】、【職員による生活支援】、【自律しうる日常生活】、【住空間としての快適性】、【安定した個々の場所】、【個室外の空間との連続性】により構成される。

表2. その人らしさを尊重したケアの内容

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
職員による生活支援	日常生活や生活習慣に関する内容	生活習慣の支援
自律しうる日常生活		
日常の生活行動		
生活習慣に関するアセスメントを行う	生活歴や個人の尊厳を視野に入れた生活支援	人生歴の把握
その人の今までの生活様式		
入居者の行動を尊重し、その人らしさとして見守る	人生歴の把握	人生歴の把握
患者の生きてきた歴史の把握		
それぞれの人生を意識して考える		
生活歴に関するアセスメントを行う	人や物との繋がりのアセスメント	人や物との繋がりのケア
これまでにあった関わりを示す		
他者との関わり方に関するアセスメントを行う	孤立化の防止	人や物との繋がりのケア
人や物との繋がり		
生活の連続性		
その人が関わった環境を見る	移動の維持・促進	環境調整
置き去りにしていないか自問自答		
心理社会的な孤立化の防止		
落ち着かない入居者に付き添い一緒に行動する	希望の成就	希望の成就
入居者の傍にいる時間をつくる		
精神面のゆとりを促す対応	好みの尊重	希望の成就
思いやりを相互にやりとりする		
移動機能を維持する	感情を引き出す	希望の成就
個室外の空間との連続性		
入居者が自分の居場所として認識できるプライベートな空間を確保する	自己表現の促進	価値観の尊重
居場所にいる		
安定した個の場所	役割遂行の支援	役割遂行の支援
快適生活創造を志向		
住空間としての快適性	能力のアセスメント	能力のアセスメント
在宅での環境に近づける		
入居者のこれまでの生活環境を施設の中に取り入れる	家族へのケア	家族へのケア
否定・強要せず活動が可能な環境を整える		
家庭的な雰囲気落ち着いて過ごせる環境をつくる	能力のアセスメント	能力のアセスメント
希望する活動を遂行可能にするために環境整備を行う		
患者の希望やその人らしさを引き出し、QOLを高める	能力のアセスメント	能力のアセスメント
患者の希望や意思をチームに繋ぐ		
暮らしについて入居者の希望を聞く	能力のアセスメント	能力のアセスメント
要望の表明の促進		
入居者の言動や反応から、その人の希望や思いを汲み取る	能力のアセスメント	能力のアセスメント
その人の希望や意欲、楽しみ		
一見些細な個人的な好みを尊重する	能力のアセスメント	能力のアセスメント
趣味・嗜好に関するアセスメントを行う		
利用者が話しやすい話題について理解する	能力のアセスメント	能力のアセスメント
well being の知覚		
自身の喜びの実感	能力のアセスメント	能力のアセスメント
その人らしさを考え、感情を引き出す		
不安への対応	能力のアセスメント	能力のアセスメント
自己存在を表出する		
自己表現を可能とした援助関係	能力のアセスメント	能力のアセスメント
利用者のコミュニケーションのくせ（方言、笑い上戸、皮肉屋等）を理解する		
コミュニケーション活動の機能を維持する	能力のアセスメント	能力のアセスメント
その人の価値観や認識		
個人的なこだわり	能力のアセスメント	能力のアセスメント
看護師自身の価値観とは合致しない患者の価値観を受け入れる		
価値観の尊重	能力のアセスメント	能力のアセスメント
独自の世界の支援方法模索		
患者が役割を果たせる場所の確保	能力のアセスメント	能力のアセスメント
社会・集団の中での役割		
日常で自己決定を支えていく	能力のアセスメント	能力のアセスメント
主体性の尊重		
自己決定の重視	能力のアセスメント	能力のアセスメント
問題解決力の重視		
想定外のパワーの発見と期待	能力のアセスメント	能力のアセスメント
その人の特技を考える		
介護負担の軽減	能力のアセスメント	能力のアセスメント
家族が患者を意味のある存在として受け入れ、残された時間を共に過ごせるためのケア		

生活創造を志向)〈住空間としての快適性)の2つのコードで構成された。また、《環境調整》は〈在宅での環境に近づける)〈入居者のこれまでの生活環境を施設の中に取り入れる)〈否定・強要せず活動が可能な環境を整える)〈家庭的な雰囲気落ち着いて過ごせる環境をつくる)〈希望する活動を遂行可能にするために環境整備を行う)の5つのコードで構成された。

【希望の成就】は、《希望の成就》《好みの尊重》《感情を引き出す》の3つのサブカテゴリーで構成された。《希望の成就》は、〈患者の希望やその人らしさを引き出し、QOLを高める)〈患者の希望や意思をチームに繋ぐ)〈暮らしについて入居者の希望を聞く)〈要望の表明の促進)〈入居者の言動や反応から、その人の希望や思いを汲み取る)〈その人の希望や意欲、楽しみ)の6つのコードで構成された。《好みの尊重》は、〈一見些細な個人的な好みを尊重する)〈趣味・嗜好に関するアセスメントを行う)〈利用者が話しやすい話題について理解する)の3つのコードで構成された。《感情を引き出す》は、〈well beingの知覚)〈自身の喜びの実感)〈その人らしさを考え、感情を引き出す)〈不安への対応)の4つのコードで構成された。

【価値観の尊重】は、《自己表現の促進》《価値観の尊重》の2つのサブカテゴリーで構成された。《自己表現の促進》は、〈自己存在を表出する)〈自己表現を可能とした援助関係)〈利用者のコミュニケーションのくせ(方言、笑い上戸、皮肉屋など)を理解する)〈コミュニケーション活動の機能を維持する)の4つのコードで構成された。《価値観の尊重》は、〈その人の価値観や認識)〈個人的なこだわり)〈看護師自身の価値観とは合致しない患者の価値観を受け入れる)〈価値観の尊重)〈独自の世界の支援方法模索)の5つのコードで構成された。

【役割遂行の支援】は、《役割遂行の支援》《自己決定の支援》の2つのサブカテゴリーで構成された。《役割遂行の支援》は、〈患者が役割を

果たせる場所の確保)〈役割のメニューだけでなく、やり方やその役割が行われる環境、状況まで分析し評価して、役割の実施につなぐ)〈社会・集団のなかでの役割)の3つのコードで構成された。《自己決定の支援》は、〈日常で自己決定を支えていく)〈主体性の尊重)〈自己決定の重視)の3つのコードで構成された。

【能力のアセスメント】は、《能力のアセスメント》《家族へのケア》の2つのサブカテゴリーで構成された。《能力のアセスメント》は、〈問題解決力の重視)〈想定外のパワーの発見と期待)〈その人の特技を考える)の3つのコードで構成されていた。《家族へのケア》は、〈介護負担の軽減)〈家族が患者を意味のある存在として受け入れ、残された時間を共に過ごせるためのケア)の2つのコードで構成された。

## V. 考察

### 1. 文献の概要

「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」の内容を明らかにしている研究は232編中16編と少なく、十分な文献や先行研究が存在しないことが明確となった。人間の内面にある「その人らしさ」を明確にするための研究は1999年に初めて報告され、まだ始まったばかりである。研究デザインも「これは何であるか?」という現象について検討する因子探索研究の段階であり、「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」は模索中であることから、質的研究が多かったものと考えられる。さらに、その人らしさを尊重したケアの対象者は、認知症高齢者が9編と他の対象者に比べて多く、改めて、「その人らしさを尊重したケア」が認知症ケアの中で重要視されていることが推測された。

### 2. 「その人らしさを尊重したケア」の内容

文献結果の分析により、8カテゴリーが形成されたが、16編の文献の対象者は、認知症高齢者だけではなく、終末期患者や対象が特定され

ていないものも含まれていた。そのため、今回、形成された8つのカテゴリーが認知症高齢者へのその人らしさを尊重したケアに適合するかを検討する必要があると考えた。そこで、「認知症ケア標準テキスト 改訂・認知症ケアの基礎」<sup>23)</sup>で示している認知症ケアの原理・原則、①高齢者の主体性の尊重、自己決定の尊重、②高齢者の生活の継続性の保持、③自由と安全の保証、④権利侵害の排除、⑤社会的交流とプライバシーの尊重、⑥個別的対応、⑦環境の急激な変化の忌避、⑧その人のもっている能力に注目し、生きる意欲、希望の再発見を可能にするような自立支援、⑨人としての尊厳性の保持、⑩身体的に良好な状態の維持と合併症の防止の10項目と本研究で形成された8カテゴリーとの関連について考察を述べる。

【生活習慣の支援】は、認知症高齢者の日常生活や行動を支え、これまでの生活を継続することであり、生活リズムを保つことになる。その際に、【人生歴の把握】をし、対象者の人生を考えながら個別的な対応をすることは、認知症高齢者の生活を豊かにすることにつながると思われる。これは、認知症ケアの原則である「高齢者の生活の継続性の保持」「個別的対応」に一致すると考える。認知症ケアでは一人ひとりが生きてきた人生に向き合い、その生きてきた軌跡を折りにふれて語ってもらえるような関わりが大事であると考えられる。また、【人や物との繋がりへのケア】により、《孤立化の防止》や《思いやりの相互作用》をすることによって、認知症高齢者との時間を共有したり、人や物との繋がりが拡大していく。そして、《自己空間の確保》などの【環境調整】を行うことは、脳の働きを刺激する環境を作り、心地よい環境、他者との交流を活発にすることができると考えられる。これらは、認知症ケアの原則である「社会的交流とプライバシーの尊重」につながる。特にアルツハイマー病の経過をみると個人差が大きいと言われ、必ずしも初期、中期、末期の典

型的な経過をたどるわけではない<sup>24)</sup>。その要因として様々なことが考えられるが、人的・物的環境を豊かにしていくことが社会的交流に繋がり、結果的には認知症の進行を遅らせることになる。さらに、【希望の成就】や【価値観の尊重】を行うことは、対象者の希望や思いを汲み取り、個人の好みを尊重し、望む生活に向けての支援につながり、認知症ケアの原則である「高齢者の主体性の尊重、自己決定の尊重」「人としての尊厳性の保持」「権利侵害の排除」をすることになる。その支援にあたって、【役割遂行の支援】や【能力のアセスメント】をすることは、対象者が持っている能力に着目し、その活用を考えることになり、認知症ケアの原則である「高齢者の主体性の尊重、自己決定の尊重」「その人のもっている能力に注目し、生きる意欲、希望の再発見を可能にするような自立支援」につながる。認知症高齢者の能力は強みとして捉えることができ、希望や価値観に着目することもまた認知症高齢者の強みを見出すことに繋がると考える。認知症が進行していく中でも、その人の強みを捉える努力は継続していくべきであると考えられる。

以上のように、本研究で形成された8カテゴリーは認知症ケアの原則を満たしており、認知症高齢者への「その人らしさを尊重したケア」につながり、その視点になり得ると考えられた。しかし、これらの8つのカテゴリーは認知症高齢者だけでなく、一般的などのような状況の対象者にも適応する内容であると考えられた。記憶障害や見当識障害などの症状が進行し、言語的コミュニケーションが困難となるなど、不可逆的な経過をたどる認知症高齢者には、その変化過程の理解や個々の認知状況に合った関わりなど、さらに特徴的な「その人らしさを尊重したケア」があると推測され、研究課題としてあげられた。

## VI. まとめ

16編の「その人らしさ」や「その人らしさを尊重したケア」に関する文献を分析し、形成された認知症高齢者への「その人らしさを尊重したケア」は、【生活習慣の支援】【人生歴の把握】【人や物との繋がりへのケア】【環境調整】【希望の成就】【価値観の尊重】【役割遂行の支援】や【能力のアセスメント】であった。

## 注

1：高齢者虐待防止法に規定される施設。老人福祉施設、有料老人ホーム、地域密着型介護老人福祉施設、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設。

2：認知症老人の日常生活自立度判定基準Ⅱは日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さが多少みられても、誰かが注意していれば自立できる状況である。

## 引用文献

- 1) 浅田隆：厚生労働科学研究費補助金 認知症対策総合研究事業、都市部における認知症有病率と認知症の生活機能障害への対応、平成23年度～平成24年度総合研究報告書、2013年3月。
- 2) 厚生労働省：平成25年度 高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果、平成27年2月6日。
- 3) [http://www3.nhk.or.jp/news/ninchisho/2014\\_0416.html](http://www3.nhk.or.jp/news/ninchisho/2014_0416.html) (2015.11.24)
- 4) 厚生労働省：認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～、平成27年1月27日。
- 5) 高齢者介護研究会：2015年の高齢者介護 ～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～、2003。
- 6) Kitwood.T. (1997) / 高橋誠一訳 (2005)：認知症のパーソンセンタードケア～新しいケアの文化へ～、筒井書房。
- 7) 岡部朋子：「その人らしさを尊重した看護」に関する看護婦の意識 終末期看護に焦点をあてて、神奈川県立看護教育大学校事例研究集録22、21-26、1999。
- 8) 濱本泰子：ICUにおける終末期で意識のない患者へのその人らしさを大切にしたい看護について、神奈川県立看護教育大学校事例研究集録25、365-372、2000。
- 9) 宮崎美砂子、井出成美、山田洋子ほか：生活の質に対する行政保健婦・士の接近方法、千葉大学看護学部紀要23、23-28、2001。
- 10) 諏訪さゆり、吉尾千世子、瀧 断子ほか：痴呆性高齢者の言動の意味の分析－その人らしさを尊重したケア技術確立に向けて－、東京女子医科大学看護学部紀要4、11-18、2001。
- 11) 春木桂子、酒井千鶴子：その人らしさとケア－主観的プロセス－、看護・保健科学研究誌、6 (3)、11-14、2006。
- 12) 中野雅子：認知症高齢者のその人らしさに関する一考察－コミュニケーション活動とADL評価から－、京都市立看護短期大学紀要32、73-80、2007。
- 13) 和泉成子：ターミナルケアにおける看護師の倫理的関心－解釈学的現象学アプローチを用いた探求－、日本看護科学会誌27 (4)、72-80、2007。
- 14) 原祥子、小野光美、吉岡佐知子ほか：ユニット型介護老人保健施設のケアスタッフが重要と考

- える認知症ケアの実践内容、島根大学医学部紀要31、1-9、2008.
- 15) 鈴木早智子、内田陽子、加藤綾子ほか：介護老人保健施設における認知症高齢者ケアの質改善活動とそれに伴う職員の思い、群馬保健学紀要32、1-13、2011.
  - 16) 林部博光、片岡紳一郎、中俣恵美：地域生活支援への視座－訪問リハビリテーションの立場より－、総合福祉科学研究2、153-167、2011.
  - 17) 辻 泰代、渡辺裕美：その人らしさを継続するための認知症高齢者グループホーム入居支援－入居前アセスメントと入居時ケアに焦点をあてて－、介護福祉学18 (1)、48-56、2011.
  - 18) 田道智治、鳥田美紀代、正木治恵：認知症患者のその人らしさを支える看護実践の構造－医療場面に焦点を当てて－、老年看護学15 (2)、44-50、2011.
  - 19) 山村正子、李 泰俊、加瀬裕子：ホームヘルパーの認知症利用者に対する情報収集の特性、介護福祉学19 (2)、147-156、2012.
  - 20) 朝倉京子、籠 玲子：中期キャリアにあるジェネラリスト・ナースの自律的な判断の様相、日本看護科学会誌33 (4)、43-52、2013.
  - 21) 青柳暁子、西田真寿美：認知症高齢者に対するアクティビティケアの内容と効果評価基準 グループインタビューによる介護職・看護職の認識、日本認知症ケア学会誌12 (4)、773-782、2014.
  - 22) 赤木徹也、鯨坂誠之：認知症高齢者の「その人らしさ」に基づく施設個室環境の概念化、日本建築学会計画系論文集79 (697)、617-624、2014.
  - 23) 日本認知症ケア学会 (編)：認知症ケア標準テキスト 改訂・認知症ケアの基礎、81-84、株式会社ワールドプランニング、東京、2007.
  - 24) 小澤勲：痴呆を生きるということ、岩波新書、19、東京、2014.

(青森中央学院大学 看護学部 講師 なかがわ たかこ)  
(弘前大学大学院保健学研究科 准教授 ふじた あけみ)  
(弘前大学大学院保健学研究科 教授 にしざわ よしこ)